

ジャコメツティの〈終りなきパリ〉

小林 康夫

プロフィール
1950年東京生まれ。東京大学大学院総合文化研究科教授。現代哲学・表象文化論。十数年来、UICP（東京大学共生のための国際哲学研究センター）の拠点リーダーとして世界の哲学者との交流対話を続けている。主な著書に『歴史のディコンストラクション』『存在のカタストロフィー』（以上、未来社）、『ころのアポリア』（羽鳥書店）、『知のオテッセイア』（東京大学出版会）など多数。

それは、わたしの生涯で（不動産をのぞいてだが）いちばん高い買物だった。もう二〇年近くも前になるか、銀座のある画廊でそれと出逢った。車よりもはるかに高い値段である。だが、その夜、あとで払うからとギャラリストに言っただけのまま抱えて帰ってきた。その嬉しさをいまでも思い出す。

それとは、アルベルト・ジャコメツティのリトグラフ『集』終りなきパリ』。かれのパリ風景のデッサンをリトにしたものが百枚以上も入っているのだ。セーヌ、ノートル・ダム、街路、カフェ、博物館の大きな骨格標本や、アトリエのヌードのデッサンもある。余白の多い、素早いデッサンだが、身中に病いの闇を抱えていた最晩年のジャコメツティの眼差しがとらえたパリの〈光の気配〉が忽然と立ちのぼる。光と死とが透明なラップのようにびつたりと貼りついて、眼差しはその見えない境界のあいだを漂い、彷徨う。パリだ。それは、また同時に、二十歳前後のわたしの魂を魅惑し、わたしの人生を決定的な仕方ですこへと関連つけたパリ。つまり〈自由〉というインデックスが指示する場処としてのパリだ。あんなにもわたしは、その明るいグレーの〈光の気配〉のなかに自分を投げ込みたかったのだ。

憧憬という古語を使っただけなのか、若いときのパリへのそんな願ひも、さすがに人生還暦を超えると終熄してしまっている。とりわけ一昨年の晩秋、コレージュ・ド・フランスで一月の講義をしたのだが、そのときパリの街路をうろついているときに「とうとうパリに到着した」という不思議な感慨が胸の奥から湧き上がってきたには自分でも驚いた。パリを観る眼差しがいささかジャコメツティの眼差しに似通ってきたのか。終りの感覚を通してこそ、はじめて〈終りなきもの〉が見えてくるのかもしれないかった。

そのことを確かめるために、というのは個人的な口実だが、この春、勤務する東京大学の駒場キャンパスにある美術博物館で、ジャコメツティのこの作品を中心に展覧会をオーガナイズしようと思っっている。「終りなきパリ、そしてポエジー」というタイトルのもと、六〇年代のジャコメツティとパリの詩人たちの交流に焦点をあてた小さな展覧会。ノスタルジーではない。大きく螺旋を描いてさらに先へとびていく時間の流れへの希望。ジャコメツティが見たあのパリの〈光〉が終りなきものであることを確かめたいのだと思う。

月刊
みんぱく
4月号目次

- | | |
|---|--|
| <p>1 エッセイ 千字文
ジャコメツティの〈終りなきパリ〉
小林 康夫</p> <p>2 特集
穴だけじゃない考古学</p> <p>2 土器泥棒と自警団 関 雄二</p> <p>4 大首長と遺跡保存 石村 智</p> <p>5 発掘のエスノグラフィー 松田 陽</p> <p>7 エジプトの考古学とアラブの春 高宮 いつみ</p> <p>8 誰にとつての「文化遺産」か？
——トルコにおける盗掘された文化遺産の返還問題
田中 英資</p> <p>10 集めてみました世界の〇〇
ボット編</p> <p>12 みんぱく Information</p> | <p>14 文化遺産おもてうら
無形文化遺産の謎——ウラはあっても「おもてなし」
飯田 卓</p> <p>16 多文化をあきなう
「インカのいのち」を世界に
大橋 則久</p> <p>18 味の根っこ
ファーフェル（前編）
菅瀬 晶子</p> <p>20 人間学のキーワード
文化遺産
飯田 卓</p> <p>21 異聞逸聞
森の僧から学ぶこと
岡部 真由美</p> <p>22 制服の世界、世界の制服
北欧型福祉国家のケアワーク
高橋 絵里香</p> <p>24 次号予告・編集後記</p> |
|---|--|